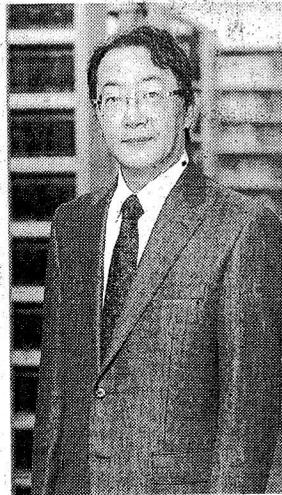


# 新元号の決定と日本の歴史

東京大学史料編纂所教授 山本 博文氏



4月1日、新元号が「令和」に決まった。「令和」に決まった。響きがいいということ、おおむね好評のようである。「令和」という「熟語」そのものには意味がないが、文章全体から考えると、めでたい月でよい気候というすがすがしさが感じられる元号になっている。

この元号出典は奈良時代に編纂（へんさん）された和歌集『万葉集』で、初めて国書（日本の書籍）から選ばれた元号である。これまで

の元号は、すべて漢籍（中国の書籍）から選ばれており、画期的な元号になった。

元号を国書から選ぶということは、確かだということには、確かなる政治的な主張が込められている。それは、一言で言えば、中国離れである。しかし、これまで元号に漢籍を典拠としていたことは、現代人が考える中国の影響とは少し違う。儒学を中心とした中国文化はいわば世界思想であり、誰もが規範とすべき思想・道徳というものであった。そのため、大正、昭和の時代にあっても、漢籍は元号の出典となったのである。

逆に言えば、元号を国書から選んだとしても、そうした意味での中国文化から自立したことはならない。「令和」にしても『万葉集』の漢文の部分から選んでいるし、その漢文にしても、中国の文献を下敷きにしたものである。

元号を漢籍から選ぶが、国書から選ぶかということは、元号が続くことによってもたらした意義に比べると、実はさまじなことである。日本の元号は、大化に始まり、大宝以降は連綿として現在まで

続いてきた世界で唯一のものである。元号は、天皇の治世の象徴と言ふべきものだから、これが連綿と続いてきたという事は、同じ国がずっと続いて来たということを示している。このことは、日本人の觀念に大きな影響を与えていると思われるのである。

それは、国家の永続性についての確信である。天皇が古代以来存在し、その統治を示す元号も続いてきたという事は、天皇という存在を君主とする、あるいは象徴とする日本という国家が続いてきたということの意味するところである。

5月1日、新天皇が践祚（せんそ）された。上皇がお考えになつてきた象徴天皇のあり方を、さつに新しい時代にあつては考えていかれることであろう。私たちも、新しい時代における国民のあり方を考えてみるよい機会だと思ふ。

◇山本博文（やまもと ひろふみ） 昭和32年2月13日生まれ。津山市出身。歴史学者。東京大学史料編纂所教授。『江戸お留守居役の日記』（読売新聞社）で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な編著書は『流れをつかむ日本史』（角川新書）『天皇125代と日本の歴史』（光文社新書）『元号 全247総覧』（悟空出版）など。

建設コンサルタント